

象牙と羊の足の骨

イギリスのマッカイル教授の著『ギリシア詩講義』(J. W. Mackail, Lectures on Greek Poetry) ⁱにティオクリトスとその牧歌を講じた一篇があり、詩人の用語の妙を説き、詩人は平凡粗俗で全く美感のない言葉を取り出し、一旦運用することができる、絶妙な詩句になると言う。牧歌第十「農夫」は農夫が歌を歌って、女的美しさを並べる、その一句に、“Podes astragaloi teu”と云う。マッカイルは「この数語には一種言うに言われぬ朦朧とした美しさが充滿している。アンドリュー・ラング君はこの牧歌を訳した時にこの美を感じた、——彼が感じないわけがなかろう。だが彼は仕方なく、ただ宮廷小説体を使ってそれを述べた。曰く、“君の脚は象牙を彫ったようだ”と。象牙を彫ったような脚の持ち主は、柔らかい衣服を着て、王宮のうちに住んでいる。ギリシアの原文では決して象牙を彫ったというような言葉はない。……彼が言ったのは、“君の脚は羊の脚の骨だ”、ティオクリトスはこの俗語をそのまま取って、生き生きしたものに変え、それを詩にしてしまった。彼はその一句によって明らかに一幅の絵を、二本の細く黄色い脚、脚輪のちゃらちゃらなる音に連れて飛んだり跳ねたりし、上体はゆらゆら揺れ、ゆっくりと歌っている——を描いただけでなく、さらに内的な一種の美感、一種の小説あるいはほとんど魔法のような趣味をも表現している。」

この牧歌第十はわたしも訳したことがあり、『陀螺』の中に載っている。わたしは Astragalos が羊の脚の骨であることは知っており、古代の婦女子がこうした脚の骨を我が郷の子どもの「称子」ⁱⁱのように投げて遊ぶことは知っていたし、ギリシアの古画でもこの遊戯の絵を見たことがある。しかし訳す方法がなかった。漢文からでは羊の脚の骨は少しの詩も美もなく、普通の連想ではただ細いというだけであり、この他には何もかも表せないから、直訳は都合が悪い。わたしはサイコロに改めようかと思ったが、この「麻雀牌」の連想もびったりいかない、結果はやはりアンドリュー・ラングの真似をして、むりやり「君の脚は象牙だ」とでっち上げた。原文の下の一句は、“Haphona de trukhnos,”で、「君の声はアヘンだ」と訳して、なんとか対になった。Trukhnos とはつまり今の医薬の Strychnine という言葉の祖先であり、一種の麻酔性のある毒草で、ここで人をうっとり迷わす歌声の形容とした。漢文でもし番木鱉あるいは莨菪で訳すなら最も適合するのだが、しかしこれではただ毒草の連想だけであって、意味は截然と違う。幸いにアヘンがあったので、まだ応用できたのである。しかしながらかの羊の脚の骨では結局完全な失敗であった。

マッカイル教授はアンドリュー・ラングを批評して、なかなか筋が通っているが、彼自身も小さな間違いを犯している。牧歌第十で恋歌を歌うかの農夫をマッカイルはバトス (Battos) だと言うが、実はこれは別の牧歌の中の牧人で、われわれの恋患いにかかった稲刈り人はブキオス (Boukios) であって、かの羊飼いとは何んの関係もない。民国十六年八月十七日。

※初出：1927年8月27日『語絲』第146期

ⁱ “Lectures on Greek Poetry” J. W. Mackail. Longmans, Green and Co. 1910. “Theocritus

and the Idyl' pp.227~8. インターネット・アルヒーフより。

girl who has stolen his heart away. Somehow or other the words are filled with an indefinable elusive beauty. Mr. Lang in translating the idyl felt the beauty—he could not otherwise—but could only reproduce it by transposing it into the key of courtly romance: “Thy feet are fashioned like carven ivory,” he renders it. They that have feet like carven ivory wear soft raiment and are in kings' houses; there is

228

THEOCRITUS

not a word of carven ivory in the Greek. The language of Battus, here and throughout his song, is that of a common rustic, with little gift of expression, whose rudimentary imagination half expresses itself in clumsy metaphors. “I'm sure,” says Tony Lumpkin while he is pretending to make love to Miss Neville in Goldsmith's play, “I always loved cousin Con's pretty, long fingers, that she twists this way and that, over the haspicolls, like a parcel of bobbins.” That is the tone of the Theocritean phrase. “Your feet are knucklebones,” says Battus; and Theocritus takes the crude phrase as it stands, makes it vivid, makes it poetry. He conveys into it not merely the whole picture of the thin brown feet leaping and falling to the rattle of anklet-rings as the body sways and the voice drones above them, but a sense of some inner beauty, some touch of romance and almost of magic.

ii 「称子」 未詳。